

## キルケゴールを読みながら

藤 井 忠

ふたたびこのような文を書くことになりました。P編集長より促され、ふわっと引き受けてしまったのです。P氏は厳しい方です。その言葉に私は駆り立てられています。

ひさしぶりにキルケゴールを読んでいたので、脳裏をよぎるものがあったのでした。しかし、はやくも窮地に陥っています。だが、窮地に陥ることなく、キルケゴールが読めるのでしょうか。もともと迷路のなかにいました。迷路ゆえに心ひかれる光景に出会っていました。それが何であったか。自分の内側をじっと探ってみます。古い井戸のなかを覗くように。いいえ、ごたごたと本の積み重なった部屋のなかで、肝心のものはどこだったか思い起こそうとしているように。しかし肝心のものが何であったかが浮かばない……

それでも、何かが見出され、文字となり、文となっていくとしたら、私のなかにすでに書くべきものが存在していた、ということになるのでしょうか。P氏の言葉は、その「きっかけ」だったと解してよいのでしょうか？

これはキルケゴールの『哲学的断片』第一章「思想計画」の問題でもあります。そしてまたソクラテスの問いでもありました。

真理は学びとれるものであるか。もし真理が学びとられるべきものであるとすれば、真理はまだ存在していないことが前提されねばならず、したがって、真理が学びとられるためには、真理はさがし求められることになる。ところが、自分がすでに知っている真理をさがし求めるわけではないし、かといって、自分の知らない真理をさがし求めることも同じくありえない。なにをさがし求めるべきかも知らないというのだから、これもさがし求められるはずはない。

この難題を考えぬいたソクラテスは、あの有名な

「想起」ということに行き着いた。つまり、「学びとる」ことや「さがし求める」ことは、すべて「想起する」というこの一事に尽きるのであり、真理は、よそからその人のもとにもたらされるのではなく、もともとからその人のうちにあったのである、という結論に達したと、キルケゴールは言います(58)。

知らずして自分の内に所有する真理を気づかせ、「産婆」としての役に徹するソクラテスを(58)、キルケゴールはこのように称えています。「彼はおのれの分に安んじ、また他人にたいしても、しかり、最も愚かな人間にたいしても、単なる『きっかけ』の役割を越えないだけの勇気と知恵をもっていたのだ。ああ、類いまれなる高潔さよ」と(60)[カッコ内の数字は、杉山好訳・『哲学的断片』(1844年)・「世界の名著」の頁を示す 以下同様]。

ソクラテスの心を最もよく理解する者とは、「自分がソクラテスに、なにひとつ負っていないことを心得ている人」にはほかならない。「ソクラテスに負うところきわめて多大であると信じているおめでたい人間には、ソクラテスのほうが、さっさと負債を免除してくれることは、まずまちがいないだろう。」(129)

当時のもったいぶった学者たちへの皮肉をもこめたこの断定の文は、今日にも十分通用し、こういう文を読むと、爽やかな気分になります。しかし、キルケゴールの手の込んだ叙述はこれから始まるわけで、気はぬけません。それに、私の気持ちは一方で、初めの箇所はまだとどまっています。

ところで、冒頭に、P編集長と記しましたが、このようなイニシャルの人はおりません。学部の同僚のほとんどが、私にとっては専門分野の異なる方々ですから、学問的な細かなところは存じませんが、しかしたしかに学問に厳しい方はおられます。その他、おらかな人柄の方や、静かな方なども。しかし、P氏なる人物

は存在しない。

これはひとつの仮名です。書けと促したのは、Phantasie 氏でした、あるいはむしろ、Paradox 氏でありました。「厳格な」Paradox 氏、という言い方は、奇妙かもしれませんが、実は、少しもおかしくはなく、逆説を前にたじろがぬことを、彼は命じているのだと解します。まさに、キルケゴールが、「情熱の対象は<逆説>である」と言い、「矛盾を一身に背負った逆説」(129)をもって、読み手に迫ってくるように。

事大主義が吹き飛ばされ、爽快ですが、さて、一方、気持ちはまだ冒頭の言葉から離れないでいます。自分の知らないものをさがし求めることも、同じくありえない。何をさがし求めるべきかも知らないというのだから……このぐるぐるめぐりの表現から、不思議な空虚のようなものを感じとって、しかもそれに惹かれています。

「問いは無知なる者によって発せられる。その際、自分がかく問うにいたった原因はそもそもなんであったかについても、問う者は知らない。」

これは、第一章の前に掲げられている「論題」の文です。「問い」だけが、大伽藍の円天井にむなしく響いて消えていくような感じがしてまいります。

しかしやがて憂鬱な単独者の逆説的弁証法が展開され、批判と思弁、文学的叙述、心理分析、諷刺と攻撃の、くりかえされる「分裂生殖」(ロマーノ・ゲルディニー)に、読者は、文脈をたどらんとして絶えざる緊張を強いられ、頭は張り裂けてしまいそうになるであります。いや、それはもうはじまっています。

この独特の逆説に巻き込まれて脳を酷使したのは、大学1・2年の頃でした。習いはじめたドイツ語の辞書を引くかわら、現実の経済問題なども含め、さまざまなことが頭のなかで回転していました。プラトンの「想起」という語が、何か見えないものへの憧憬を誘い、モンテーニュなどフランス・モラリストの系統にも関心をもったりしていました。種々のものが混在するなかで、キルケゴールについては、唯美的なるもの・倫理的なるもの・宗教的なるものの諸段階を経て真理に至るといふ、つねに問題とされるこの過程よりも、自分の知らぬうちに絶望という状態に陥っている人間の状態をあばいていくその叙述の展開の細部に、むしろ心はとらえられていました。どれだけついでい

けたかは分かりません。いまよりもはるかに神経質にもものを感じながら、朦朧として中心の定まらない日々のなかで文に没入し、燃焼することが読むことであつたのではないかと、思います。

ソクラテスは、どこか宙をさ迷うような憧憬を言っただけではありません。冷たい口調で、——ソクラテスは「徳一般をねんごろに勧め終わったその瞬間人々を突き離して、あとは各人自身の生き方にまかせてしまふ」(63) ようでした——汝の内部にあるものを想起せよと言います。もともとその人のうちにあつたのだと、あの頃言われたならば、自分が気づかぬうちに何かを失ってしまったことを感じ、幼年時代へと思いをはせ、それから、戦争から戦後の混乱期に少年時代を過ごした自分の過去を、不安な思いでふりかえっていたでしょう。まさに「なにをさがし求めるべきかも知らない」自分の途方にくれた姿に突き当たっていたことなのでしょう。そうでなくともあの頃は、奇妙に抑えがたい活力と、若さゆえに感じる衰退と不安を覚えていましたから。そのようななかで、想起すべきものが消えてしまっていることを思い、この「想起」という言葉は魅力的ですが、私自身は永遠の時間を彷徨していき、無重力となった自分を感じざるをえなかったであろうと想像します。

あの頃のことで心に残っている場面があります。新劇の劇団の人たちに連れられて、ある作家の家を訪ねました。その方の、ホー=チ=ミンについて書いた本が出て間もなくのことでした。私は演劇青年ではなかったのですが、ドイツで出版されたばかりの戯曲の内容を知りたいからとその劇団の人に言われて全体を訳出したのが縁で、演出部の人と付き合いようになって、舞台稽古を見せてもらったりしていました。作家を訪ねたのは、ヴェトナム戦争(といっても、フランスとの戦争)の末期で、たしかディエン・ビエン・フーが陥落したばかりの頃で、自然、政治の話になって、その作家は教条主義的議論をやんわりと退けながら、私より二、三歳年上の若い演劇人たちの主張にひとつひとつ答えていました。革命にはね、いろんなタイプの人がかかっているんだ、という意味の言葉を覚えています。曲がり角にきていた時代を反映するかのよう、誰かが、これからぼくはもう是々非々でいきますと言うと、それがほんとうはいちばん難しいんだなどと作家は答えていました。相当の年齢かと思いましたが、意外にそれほど年を取っておられなかったかもしれま

せん。憂鬱そうな人でした。たしか、双子だったと思いますが、二人の可愛いお嬢ちゃんが次々と料理を運んで来て、くつろいだ雰囲気でした。しかし初めての私は少し堅くなっていて、上に書いたような状態にあったので、きわめて個人的なことを口にしてしまったのですが、作家は私のほうを向いて、そういう気持ちは、靴のなかに小石が入っているようなものかもしれない、と呟いたのでした。

靴のなかの小石だから、そういうものは早く取り出してしまったほうがいいよ、とはその人は言わなかったし、小石に心を奪われずに、もっと広くものを見ることだ、とも言いませんでした。話題はすでに別の事に向かって、私はとり残されたような気分でした。

あれからずっと、靴のなかに小石を入れっぱなしで、ひとりで痛みを感じてきたような気がします。そういう個人的なものを無視し、押し流していく動きをいろいろの局面で感じながら。

「人間は精神である。しかし、精神とは何であるか？ 精神とは自己である。しかし、自己とは何であるか？ 自己とは、ひとつの関係、その関係それ自身に關係する關係である。」「自己とは關係そのものではなくして、關係がそれ自身に關係するということなのである。」

『死にいたる病』のこの冒頭の言葉を読んでから、もう40年が過ぎました。その間の時代の流れが、あるいは個人的には、さまざまな場面で選択や決定を行ない、また決意せぬまま事態を受け入れ、それによって生じる現実を生き、それら体験を心に積もらせていくことが、言葉を、自分の内面にめりこませていくことになりました。そしてあるとき、突然、自己が自己というひとつの關係にのみゆだねられていることの意味に気づく。無論その言葉だけを考えているわけではないのですが、そのようにして、言葉は内部で生きつづけていく。

「人間をこのような關係たらしめた神」は、「人間をいわばその手から手放された」のである(439)。手放され、關係がそれ自身にのみ關係するにいたった人間は、何ものにも拘束されることなく、自由に、しかし支えなき領域において、自我を、そして自我の欲望を拡大していきました。その自己運動において、人間が作り出していく世界を、人間自身はもはや支配できなくなっています。

いま、『哲学的断片』を読み、そこに、「真理の外にある」人間のあり方、あるいはまた「神と人間との隔絶」が描き出されるのを見るのですが、いかにも自由に振舞っているかに見えるわれらは、「非自由」にもかかわらず自由に振舞っているにすぎず、「自我の牢獄に身を閉じこめた人間」にほかならないことが、理解されてきます。

先取りして言いますと、人間が「想起」させられるのは、自己の内部に真理があるということではなく、逆に、自己が真理の外にあるということで、また、神と自己との間の隔絶であって、しかもそのことは、人間自身の認識の力で知るのではなく、「神によって知らされる」、とキルケゴールは考えます。こういうことも、いままさに自分の問題として迫ってくるようになりました。神によって知らされる、これはどういうことなのか。あとで取り上げなければなりません、人間の側からの、いつしか人間につごうよき格好で行なう、神に関する思考や認識を、キルケゴールは退けるのであります。それが今度読み直して分かってきました。人間の恣意性が排除されるのだと。その姿勢が叙述のさまざまな箇所感じられます。そして、人間がその孤独を徹底して知ることが、第一歩を踏み出す前提となるのですが、その瞬間にいたる人間の姿を、『哲学的断片』はむしろくりかえし追及し、鋭く不安な、興味深い認識を示します。

さて、冒頭に掲げられた「問うにいたった原因がなんであったかについても、問う者は知らない」、あるいは、「何をさがし求めるべきかも知らない」という文に感じる空虚さは、人間の寄る辺なき存在を、まず暗示するものではないかと感じました。

ところで、後者の、自分の知らないものをさがし求めることも、同じくありえない。何をさがし求めるべきかも知らないというのだから……の文、これは、プラトンの『メノン』のなかに出てくる言葉をもとにしています。

六十半ばを出たソクラテスは、このような問題の展開の仕方は「論争家ごのみの議論」になっていくもので、信じてはならぬと、若きメノンをたしなめています。なぜならこれは人を「怠惰にする」もので、「怠惰な人間の耳にこそ、快くひびくもの」だからだと。不毛な論議であることを警告したあと、ソクラテスは、徳は学ぼうるかとの問いについて、「魂の不死」に關す

る話をします。不死なる魂は、幾度となく生まれ変わり、この世と、ハデスの国で、ありとあらゆるものを見てきている。だから、魂が学んでいないようなものは、何ひとつとしてないし、魂が想起起こすことができるのは何も不思議なことではないのだ、と。ところがキルケゴールは、ほかならぬ、ソクラテスが排した論法をむしろ表面に立て、ソクラテスをこの論議に巻き込み、あの「想起」へと導いていったのでした。

『哲学的断片』は、「ヨハンネス・クリマクス著、S・キルケゴール刊行」という形で偽名の著者名で発表されています。『クリマクス(天にのぼる梯子)』という禁欲的・神秘主義的な本を書き、この著書の題名で呼ばれるようになったシナイの修道院のある院長(579-649?)の名からとったもので、ちなみに『死にいたる病』(1849年)は、「アンティ=クリマクス著」となっています。その上、作者は、著作のなかでもさまざまな仮面をかぶって現われ、仮面が語る意見をいつの間にか問題化し、あるいは自分に引き寄せ、また突き放す、などの方法をとっていて、油断がなりません。

ここでは、尊敬してやまぬソクラテスの言葉をスプリングボードにして、一挙に、キルケゴール自身の問題領域に入ります。と同時に、「想起」の概念をひっくり返す。——すなわち、もしも人がすでに真理を所有していて、学ぶということが、それを知る単なる「きっかけ」でしかないのであるならば、「発見のその瞬間」は、その者には「自覚」されぬまま、「永遠のうちに包み込まれ」、「吸収されて」しまうのではないか(62)、と。瞬間を無自覚に通過させることによって、「本来『あれか、これか』の形で決断さるべき問題を解消してしまう」のではないか(63)と。

『哲学的断片、または断片の哲学』は、その題名がすでに示すように、人間の頭が構築する体系とか連関性とかいうものにたいする戦いでもあります。「想起」という形ですでにあるものと「うしろ向きで」連関性を求める姿勢を問題化していくように、必然的展開のうちに事を関係づけ体系化するヘーゲル学者たちにたいしても、キルケゴールは、「瞬間」の概念を情熱的に打ち込み、それら「連関性」を碎きます。

「『瞬間』が決定的な重みをおびさせられるとするなら、さがし求める人間は、その決定的瞬間までは真理を所有しなかったことにならざるをえない。たとえ無知という形においてであっても、真理をもっているこ

とは一切許されないのだ。でなければ、瞬間は『きっかけ』の役割しか果たさぬことになる。」(63)

すべては、「瞬間」という一点をもとに回転しています。「瞬間」が決定的な重みをおびさせられるとするなら、という仮定の言い方で記されていくことにより、「真理をもっていることは一切許されないのだ」と断定されます。「瞬間」が決定的な重みをおびさせられる、とあります。誰によっておびさせられるのか? 人間が主体的にかかわってはいる。しかし人間の能力だけで瞬間が重みをおびるのではないことが予感されます。この仮定の文は、すでに物事が、ソクラテスの考えたのとは別の次元に入っていることを暗示しています。いわば舞台の場面は切り替わっていて、ソクラテスは退場しており、くたくだと転換の理由を述べることもないかのように、キルケゴールは、その新たな、仮定とともに導き入れられた場面を、容赦なく展開していきます。

「したがってまた人間は、真理の外にある存在として、言いかえれば非真理として規定されねばならぬ。人間は非真理なのである」(63)と。

教師が学ぶ者に想起させることは、ソクラテスの言うように、自分が知らぬうちに真理を所有していたということではない。逆に、「自分が真理の外にあること」、「自己の非真理性」を、厳しく認識させられるのである(64)と。

いまや真理は、人間にとって、「自分のうちに思い見ることもできない」ものとなります。心のなかをどれほど探しまわり、どんなに思い起そうとしても思い浮かばない。記憶の欠落に接したときの、目がくらむような、自己の内部の空洞の感覚を思い描かざるをえないところです。しかしキルケゴールが言っているのは、そのような実感する次元のことではなく、もっと不気味なことに、自分では何も気づかぬうちに、実は「非真理」として存在しているということです。

非真理として存在しているということは、単に真理から離れ出てしまっていることでなく、「真理に刃向かっている」ことを意味する(66)。

しかも、自己の「非真理」としての存在を認識することによって、その者は逆に、「まさに真理から締め出される」、いやむしろ「いっそう決定的に締め出される」のである(64)と。この部分は興味深いところですが、私は、まずここにつまずきました。

その先を読むと、「非真理」であることは、「おのれ

自身の咎」のゆえで、キルケゴールはこれを「罪」と呼ぶ(66)。その者は、「自分自身のせいで縛られているながら、彼は自分自身を解き放って自由の身にすることができない」のだ(66)、と書いてあります。『死にいたる病』にこれと似た文があります。

「全力をあげて、自分自身の力で、ただひとり自分自身の力だけで、絶望を取り除こうとするとすれば、そのとき彼は、なお絶望のうちにいるのであって、自分では全力をふるって努力しているつもりでも、努力すれば努力するほど、ますます深い絶望のなかへもぐり込むばかりである。」(436)

『哲学的断片』の叙述のほうには、このような心理分析の調子はなく、それだけに、真理からの締め出しは、いまや人間の意志や努力にかかわらず存在するひとつの事態として、より決定的なるものの印象を強めます。逆説の意味を探るべく無理にその扉をこじ開けようとするよりも、逆説そのものを受けとめられるかどうか、問題であるようです。

そのあたりの叙述に付された「注」に、「非自由」という玩具を買って(選んで)しまった子供の話が出てきて、面白いので、それを先に引用してみたいと思います。

「ある子供がお小遣いを少しばかりもらったとする。その金額でたとえば良い本を一冊買うこともできれば、玩具を一個買うこともできた。どちらも同じ値段だったから、そのどちらかを選べたのだ。ところでその子供は玩具を買ってしまった。同額の本をそのうえに買えるだろうか。それはできない。持っているお金はもう払ってしまったのだから。だがその子供はきっと本屋に行って、あの玩具を本と取り替えてもらえないかと尋ねることだろう。そこで本屋がこう答えたとする。『坊や、あんたのおもちゃじゃなにも買えないんだよ。そりゃあんたがまだお金を持っていたときにゃ、本だって、おもちゃだって、好きなほうを選べたのさ。ところがおもちゃに化けちまうと事情が別だね。買ったら最後、一銭の値打ちもなくなっちゃうんだから。そしてこう言われた子供のほうは、なんとも奇妙な話だと考えこまずにいられるだろうか。』(69)

譬え話ですから仮定のうえに成り立った文であるのも当然ですが、実際に誤った選択をし、それを悔やみ、しばらくの間、あるいはずっと、それが頭から抜けきれないといったことを経験した者には、身につまされ

る話で、一貫して仮定の口調をとることにより、かえってなまなましく迫ってもきましょう。玩具を買った動機、その他のことは、いっさい空白のまま、どのようにも解釈できそうですが、しかし話は、ひとつのことしか言っていません。同額の本をそのうえに買えるだろうか、それはできない、とあるのみで、お金の段階では、選択は可能であったが、いったん、一方を選ぶと、同時にすでにもう一方の可能性は否定されてしまっている、ということしか伝えていません。この簡単なことが怖い。その間のどのような心理状態にも関係なく、人は選び、現実に関わることによって、可能性のほのかな甘い味は瞬時に消えて、目の前には、その結果が厳然と存在する。子供は自分がいま手にしているものでもはやどうしようもなく、それは一銭の値打ちもないものと断定され、突き放され、しかしその意味は分からず、考えこんでいるらしい。このそっけない記述に、次の文が並列されます。

「同じように、人間にとって自由も非自由も、同一の代価で買うことのできたときがかつてはあったのだ。そしてこの代価とは、なにものにもとらわれずに選択する魂の自由であり、選択そのものを賭けることであった。こうして人間は非自由を選んだ。そこで彼が神のみもとにやってきて、これを取り替えていただけないでしょうかと訴えても、こんな答えが返ってくることだろう。『君も、かつてはまぎれもなく、自分のほしいとおりのものを買えたのだ。だが非自由とは奇妙なもので、これを買ったら最後、払った代価がいかに高価であろうと、一文の値打ちもなくなってしまうのだ。』これを聞いた人間のほうは、なんとも奇妙な話だと思わずにはいられまい。」(69)

同一の代価で買うことのできたときが「かつてあった」。キルケゴールにおいては、墮罪の問題は回避できない問題です。もし自由を選んでいたら、という仮定は、すでに考慮の外にあります。かつて選択の可能性があったが自分で非自由を選んだ、ということが大事で、しかも、選んだものの価値は否定され、非自由であることが宣告されています。彼は奇妙な話だと思っていて、その途方にくれた様子の背後に、「選択そのものを賭ける」という重い言葉が控えています。すでに起きたことの代価として。

本文をもとに言うと、ともかく非自由の状態は、「なにかの偶然によって起こったことではない。このことは、人間自身がしでかした」のである(65)。す

なわち、「彼の自由は非自由のとりことなる道にこそほかならぬ」(68)のものであった。そして彼は、「非自由に身を委ねた」(68)のであった。それゆえにまた、想起させられる瞬間が単なるきっかけとして消え去ってはならないのであり、瞬間は、決定的な重みをおびなければならない。

「注」の文は、その「瞬間」の問題を次のように表現します。

「もし事態が一転して、瞬間が決定的な重みをおびることがなくなるとすれば、例の子供はもともと本のほうを買っていたのだけれど、ただそのことを自覚せず、自分では玩具を買ったと誤って思い込んできたにすぎないことになるだろう」と。

つまりこの場合は、思い違いを指摘すればよい、ということになるでしょう。ほんとうはね、坊やが持っているのは、本なのだよ、きみはもともと本をもっているではないか、と気づかせてやれば、それですむ。そして子供は、ああそうか、そうだった、と思う。それでほっとして、気づかされた瞬間のことは忘れ、たいていは、自分が本来所有していたものの価値を真剣に考えることもなく、事は過ぎ去り消え去ってしまうのでありましょう。

では、子供が本のことなどまるで頭になく、買った玩具で楽しく遊んでいるとしたら、つまり、非真理でありながら、それに気づかないとしたら、どうなのでしょう。

そこまでは「注」には書いていません。しかし、本文においてキルケゴールはこういうふうに言っています。すなわち、真理の外にいる彼は、「一見自由に振舞っているかに思われる」、しかし自由だと思っている彼は、「まさに不自由であり、縛られ、締め出されている」のである(65)と。「自分が絶望していることを知らないでいる絶望者は」——『死にいたる病』のなかの文が思い出されてきます——「それを意識している絶望者にくらべると、真理と救済から、否定ひとつ分だけよけいに隔たっている。」(475)

その付近をもう一度、開いてみると、「現実性は絶滅された可能性である」(438)という文に突き当たります。「現実性」というのは、ここでは「絶望していないということ」で、これもまた「一種の否定」であり、「無力な、絶滅せられた可能性」である(439)。

「もしある人間が絶望していないということが真実でありうるとすれば、彼は絶望するという可能性をあ

らゆる瞬間に絶滅させるのでなくてはならない。」(438) [『死にいたる病』(1849年); 榊田啓三郎訳, 438は「世界の名著」(423-585頁)のなかの頁を示す]

「絶望は罪である。」しかしキルケゴールにおいては、「罪は否定的なあるもの、単なる欠如ではなく、積極性をもつものである」ことを、ヘルマン・ディームは強調しています。罪の積極性は、「そこから人が抜け出さない各瞬間において生じるような、そういう性質のもの」であると。

非真理として存在しているということは、単に真理から離れているだけでなく、「真理に刃向かっている」ことを意味する(66)とありました。つまり、非真理としてあるということは、真理理解の可能性を刻々と潰している、ということになるのでしょうか。

こうして自己の罪を認識し、それを「刃向かっていること」として認識することは、神の啓示とかかわることなのであります。つまり先のディームによれば、まず「罪の啓示」がなければならず、「人間がみずからの状態を罪として、いいかえれば、単に欠如としてでなく、神にたいするひとつの積極的な抵抗として認識すること」がなければならない。そして、「罪の啓示と同時に、罪の赦しも啓示される」(ディーム)のです。したがって、罪としての自己のあり方を気づかせられるのが、偶然のきっかけであったり、また、罪をただ弁証法的過程の内部で止揚されるべき一契機にすぎない、などとは考えられないこととなります。

ところで、「自己などというものは、世間ではいちばん問題にされないものであり、それをもっていることに気づかされるのがなにより危険だというようなものだからである。自己自身を失うという最大の危険が、世間では、まるでなんでもないことのように、いとも平静におこなわれているのである。これほど平静におこなわれる喪失はない。」『死にいたる病』(460)

さて、「真理を理解する能力とは、人間を人間たらしめる本質的な能力である」(65)のだから、自己が真の自己たらんとすれば、非真理としての存在から、真理としての存在へ変わらなければならないということになります。しかしキルケゴールにおいては、このような移行は「およそ人間の可能性の範囲内にはもはやないこと」(ディーム)なのであり、人間は「自分自身のせいで縛られていながら、自分自身を解き放って自由の身にすることができない」(66)という、逆説のうちにあるのであります。

ではその彼、すなわち「自我の牢獄におのが身を閉じ込めてしまった」者に、「真理理解の能力をふたたび回復し、かつあわせて真理そのものを与えてくれる教師」(68)とは、誰なのか、どなたなのか？

この「救い主」は「神」以外にはない、と言う。非自由<sup>ちから</sup>に身を委ねたことは、「答」であり、その答のうえには「怒り」がかけられている。だが、彼に真理を理解する能力と真理を与えたもう「かの教師」は、「贖い主」にほかならず、答にかけられていた「怒り」を取り除いてくださる(68)。いまや、ソクラテスにたいして、イエスが現われます。神でありながら、人間として存在するという矛盾を、一身に背負う存在が、かの「受肉」ということが、キルケゴールにとって重要な問題となります。この「教師にして救い主なる神」の章には「詩の試み」という副題が付与されており、『哲学的断片』の叙述のなかの最も美しい、高揚せる部分です。

学ぶ者は自己の非真理としての存在を気づかされるのであるが、彼は「一切を教師に負い」つつ、「無にされながらしかも滅び亡せず」、非真理たるわが身の「答のいくばくなるかを思いしりつつ、しかもこだわりを捨てた率直な信頼が真理によって最後の勝利を占める」のである(87)。これが「神の愛」である。神はそのとき相手と等しい立場までおりてこなければならぬ。それゆえ、神は、「最も卑賤な人間」、すなわち「僕」となり、仕えなければならぬ。しかも、王が一時乞食の姿をとると異なって、その僕<sup>しもべ</sup>の姿は、およそ借りものではなく、「神の真<sup>まこと</sup>の姿」なのだ。

「底知れぬ愛」とは、「ただひとすじの真摯<sup>しんし</sup>と真実を賭けて、愛する者と等しくなろうとするものであるから」だ。「見よ、かくて彼がかしこに立ちたもう。彼——神その人が。いずこに？ かしこに」と(89)。

「詩の試み」の題にはまた独特のイロニーがこめられています。「神をそれ以外に描くことが、われわれの詩ではできない。だが詩に描いてみたからとて、それがどれだけの真実を証<sup>あかし</sup>しているだろうか」(123)と、別の箇所<sup>あかし</sup>に書き添えられています。神の存在を証すことはしない、これがキルケゴールの姿勢です。では、どうするのか、神に「身をゆだねる」と言います。それがほんとうの第一歩であると。そしてそれを最後まで貫きとおすのであり、貫きとすことが「この

私に許されると賭けた」のである(102)と。

神は、これこれのことをなされたがゆえにかくのごとく存在するという、事績からその存在を証明することを、彼は拒否しました(102)。それには、十分な理由があります。もしこのような神の現存在の証明に立ち入ったならば、「ここに、このうえなく恐ろしい試練が現われないでいようか。そしてそういった試練のすべてを切り抜けることは、不可能な業ではないのか」(102)と言います。おぞましい出来事を前に、さあ、これが神の造った世界か、神はどこにいるのか、と時にシニカルに問われる、そういう場面が、そういう現実が、今世紀においてどれほどしばしば起きているかを思うなら、この言葉は、不気味なほど現実味をおびてきます。彼は、いかにこの世界が不条理にみちているかを熟知していました。そして「中途半端な」小細工から、手を引きます。

たとえば、起き上がり小法師をじっと握りしめている限りは、それはぼんと起き上がってはくれぬのと同じように、「手を離さねばならない」(102)。

「この手に証明を握りしめているあいだは、神の存在は現われてこない」(102)のだ。キルケゴールは、手を離す。この「一瞬間」が、『飛躍』の瞬間となる(104)。この「些細な一瞬」<sup>ささい</sup>、「私<sup>わたし</sup>が手を離すということ」も、「やはりなにかがしかの行為、しかり、私のほうからなされた行為」なのである(104)と。

これでおしまいではなく、「詩的試み」のあとにつづくのは、「絶対的逆説——形而上学的奇想」。ぶり返しのごとき形で、神という「このえたいの知れないもの」をめぐって逆説につぐ逆説の、うねるような叙述がつづき、そのなかで、人間の孤独が、無の縁に立つ姿が明らかになります。それとともに、救い主と人間との間に、人間の側からの、人間が頭のなかで形づくる関係の設定が崩されていきます。

このえたいの知れぬものは、理性にとっては、「乗り越えられぬ壁」のごときものである。だが乗り越えられぬがゆえに、理性はそれと絶えざる緊張のうちにあります。つまり壁は同時に、理性にとっては、「その情熱の刺激者」でもある(106)と。

そしてこの神と人間との隔絶は、人間が知るのではなく、神から知らせてもらうのである、と書かれています。人間は神を必要とするのに、いまや「人間に知らされる」のは、「神が自分とは絶対的に異質、つま

り隔絶していること」なのである (109)。神によって知らされるということ。ヘルマン・ディームの次の言葉は参考になりました。——すなわち神と人間との絶対的な異質は、神から知らせてもらうときにはじめて知るのだが、人間は、「ふだんはいつも自分自身の思考にしたがって、神を考えているだけであり、それにともなって、けっきょくは自分で神を生みだしたのである」と、ディームは述べます。

キルケゴールが、いかに人間の恣意性を退けようとしていたかが、いっそう理解されてきます。

神の存在を理性によって証明することを拒否したのと同様、人間が人間自身の頭によって神との関係をつくっていくことにたいしてキルケゴールは反対しますが、その姿勢は、『哲学的断片』の題句として冒頭に掲げられたシェイクスピアの一句に、すでに表わされています。「みごと縛り首にでもなりゃ、へたな結婚なんぞしないですむというもの。」これは、哲学的思惟（理性の立場）とキリスト教的啓示（信仰の立場）との総合を批判したもので、ヘーゲル哲学によるこうした「総合」（哲学とキリスト教との「へたな結婚」）が、ここでは暗示されています。

キルケゴールにおいては、総合が問題ではなく、情熱の対象は「逆説」、「矛盾を一身に背負った逆説」(129) です。

「可能性のなかにあったものが、現実となることによって、可能性であったとき以上の必然性を獲得するか？」(142) これは「間奏曲」と題した章の冒頭の文で、「過去の解釈」の項では次のようになります。

「それが生起したということは、疑う余地のない、確かな現実なのだ」が、「それが生起したというこの点にこそ、また実はその出来事の不確かさがひそんでいる」(152) と。

これと関連して思い浮かぶのは、次のヘーゲルのテーゼ。

「真理は全体であり、真の現実<sup>①</sup>は理性であり、世界は絶対者としての概念（理念）の弁証法的発展の体系である。」（『精神現象学』1807年）

たとえば、「つぼみは、花が咲くと消えてしまう。そこで、つぼみは花によって否定されると言ってもよい。同じように、果実によって花は植物の偽なる定在と宣告され、植物の真として果実が花の代わりとなる。」しかし、これら「相容れない形式」が、「同時に有機的統一の契機」となり、この統一にあっては形式

は互いに対抗しないばかりか、一方は他方と同じように「必然的である」ことを示す。このような「真理が前進するときの展開」を、人は見なければならない（『精神現象学』）。

世界理性は、歴史を貫いて不退転の歩みを進め、認識者としての人間は、それを認識する。ヘーゲルの意図によれば、こうして「その意味を完全に把握しうる歴史という形態」において、「新しい世界住居」を建てようとしていた。しかし彼の築かんとした家は、「居住不可能であることが判明した」のだった、とマルティン・ブーバーは言っていますが、「住居なき」人間の存在を追及するキルケゴールにおいては、次のような文となります。

「可能性というばらの蕾は、現実性というむごい手によってむしり取られて、無のなかに投げ込まれてしまうのである」(145) と。

キルケゴールは、生成を、一種の「受け身の苦しみ」ととらえます。

「現実の苦しみとは、可能なるものが、現実に移されるその瞬間に、無としての正体を現わすところこそある。」(145)

「生成してくるものの母胎」は、「非存在」であり(145)、生成とは、「そこにはない」ことから「そこに在る」ことへの変化(144)を意味する。つまり、「無からの、『非存在』からの、また存在の仕方の多様な可能性からの移行」が行なわれるということ、それが「生起してきたこと」であり、「出来事の紛らわしさとは」、その点にある(155)。

生成への「驚嘆」(153)。驚嘆は生成そのものにつわる不確かさとも関係している。目的をめざす前進の動きのどれにも、「一瞬ごとに休止がある（ここで驚嘆も停止し、<sup>かならず</sup>固唾をのんで生成を待つのだ）」(155)。

そしてまた、「それが生起したというこの点にこそ、また実はその出来事の不確かさがひそんでいる。」(152)

次のも難解な文ですが、上記の「可能性というばらの蕾」の文とも関連して挙げておきます。そこでは、おのれの虚無性と、おのれが生起するとともに他のすべての可能性を否定してしまっているということ、いやそれだけでなく、自己が生起するとともに、それまでのその可能性もまた否定されてしまっていること、



否定されて無となっていることが、表現されており、現にある姿の背後に、気の遠くなるほどに連なる、否定された可能性の絶望が、忽然と浮かび上がってくるような思いがいたします。

すなわち、この「出来事の不確かさ」こそ、「二重のもの、すなわち『非存在』者の虚無性と、そして他の一切の可能性を否定すると同時におのれみずから否定されて無に帰してしまった可能性の絶望とを、あわせ含んでいる」、のである (155) と。

現実性は、無言のうちに、否定された可能性によって絶えず相対化され、または問題化されうることになるのではないか、という思いをこれによりより強くせざるをえないのであります。

「あれかこれか」の選択へと自己を追い詰め、「瞬間」の決断に賭けるという主題にともなう、上に挙げたような、生起にまつわる不確かさ、否定された可能性への執着とも言うべきものを示す文は興味深く、今後考えたいことで、今日は引用にとどめることにします。次に記すのは、まったく個人的な Exkurs であります。

\*

「それまでは自己自身を知っていると信じていたのに、ひょっとすると自分はテュボンよりもっと複雑怪奇な動物であるか、でなければ自分のうちにもっと穏和な、神に似たところをもった存在であるのか、もはやはっきりとわからなくなってしまふ。」(99)

この、『パイドロス』のなかのソクラテスの言葉は、『反復』(1843年)にも現われていますが、テュボンとは、火山と嵐の神で、百の竜と火を吐く眼をもち、声を聞いただけでも身の毛もよだつといわれる怪物のことです。

自己を知ることに関心を傾注してきた、あの最もよく人間を知ると言われたソクラテスが、自分の内部に何が存在するのかわからなくなると言っているところが面白い。キルケゴールは、これは「ひとつの逆説」であるようにみえると言います。逆説とは、「思想の情熱」であり、すべて情熱の極致は、「自己自身の破滅を欲する」ところにあるのだと。そして、理性の情熱の極致もまた例外ではなく、情熱は、「理性自身にとってなんらかの仕方破滅をもたらさずにはいない『つまずき』を、あえて欲する」ところに見られるのである (96)、と。

「自分で自分がはっきり分からなくなっていく」ということについて、私はここで個人的な「注」を付してみます。しかしそれは理性の逆説的情熱が目覚めて、おのれの破滅を求める場合とは違います。

そうなりたくないとは人は思っているが、人生の終わりにそうなるかもしれぬ自分の可能性については、誰もきっぱりと否定はできぬであろう姿の一端です。

「いつか<sup>わたし</sup>莊周は夢のなかで胡蝶になっていた。そのとき私は嬉々として胡蝶そのものであった。ただ楽しいばかりで、心ゆくままに飛びわっていた。そして自分が莊周であることに気づかなかった。ところが、突然目がさめてみると、まぎれもなく莊周そのものであった。いったい莊周が胡蝶の夢を見ていたのか、それとも胡蝶が莊周の夢を見ていたのか、私にはわからない。けれども莊周と胡蝶とは、確かに区別があるはずである。それにもかかわらず、その区別がつかないのは、なぜだろうか。ほかでもない、これが物の変化というものだからである。」

かつて、この莊子ののびやかな夢に心を託して、ふっと息をついたときがありました。かたわらには、自分が自分で分からなくなった老人が横たわっていました。老人は八十を越えてまだ現役でいたし、正常でしたから、老人という気があまりしていなかったのですが、ある日、階段で足を滑らせたのがきっかけで、突如、老人の陥る痴呆・デリリウムの領域に入っていました。ゲーテは「老いはわれわれを不意にとらえる」と言いましたが、おそらくその言葉が意味する過程をも一挙に越えた、苛烈な状態に接し、時に激烈な謔言を聞き、無意味な行為の絶えざる反復を見ながら、カフカの短篇のなかの、「自分の家にどんなものがしまっているか、わからないのですわねえ」という文句を思い出しました。人間は自分の内部に何があるのかを、自分自身でも分かっていないものであることを、私は知らされていたのです。あれはいったい、ほんとうのところどうだったのだろう、といまでも思います。まるで分からなくなっているわけでもないようでした。自分で自分が抑制できぬことを口にし、「こういうことは、お主ら、自分になってみないと分からぬぞ」と言ったりしていましたから。まさしく自分になってみなければ分からぬことでもあります。さいわい、半年ほど経つと容体は和らぎ、私の妻の持参する料理をたのしみ、いい味付けだとほめたりして、穏やかな日々と

なりしました。ある日、パンジーを持っていきました。美しい花を手にし、じっとそれに見とれていましたが、やがて困惑の表情を浮かべて、妻のほうを向き、声を低めて、これは、どういうふうに見えるものかなと尋ねたのでした。

こちらの説明に、どこか納得のいかぬような顔を見せたのは、ほんのひとときのことです。しかし老人はもう状況に調子を合わせたり、その場を取り繕ったりはしないだけに、途方にくれたその姿は、ひとときそのままの格好でとどまっていました。大きなガラス窓から差し込む光を浴びて、色鮮やかなパンジーはしばらく彼の手に握られていました。おそらく、いつものようにおいしい料理だと思って受け取ったのですが、それはあまりに美しく、頼りなく、自分の手のなかで、何か分からぬものになっていたのではありますまいか。

もしあのとき、いきなり花びらが口に入れられていたら、別の光景となっていたでしょう。私たちが日頃いかにも無造作に、自明のこととして目の前の事物に接するのは、あたかもいきなり花びらをむしりとるようなものかもしれぬと、ふと思います。

しかしいわゆる老人問題は、経済の問題であり、体力・気力の問題であって、そういう形で、当事者となった家族は全面的にその力を問われ、へとへとになっていきます。そのような日々がしだいに重みを増して肩にのしかかってきます。私たちよりもっと苦勞している例を多く聞かされました。福祉行政など、現実にはたいするひそかな怒りが人をどれだけ消耗させることか。にもかかわらず、事を背負うのは、その人・家族以外にはありません。そのなかで、胡蝶の夢がありました。あるいはまったく別の、ジャン・アメリーの『老いについて』(1968)の、容赦ない老いへの切り込みを一種の熱狂をもって読んでいました。

第二次大戦中、ユダヤ人として強制収容所生活を送ったこのオーストリアの作家は、一切の人間の尊厳が剥ぎ取られ、言葉が沈黙していく状況を体験し、その鋭い暗い眼が、老いに向けられていきます。逆説を梃子とする彼の叙述は、私が出会わなければならない日常のなかの不条理にたいしてある抵抗力をさずけてくれるものでありました。そこでは淡い期待など捨てることが要求されます。シモーヌ・ド・ボーヴォワールの老いについての仮借ない自己認識をふまえつつ、ジャン・アメリーは独自の仕方では、自分がもはや自分で

ないことを感じる者の姿を追及していきます。老いゆく者が、今の瞬間にさらすのは、「肉体」としての「自己の現存」です。彼の心は過去に生きる。しかしそれはもはや心安らぐ場としての過去ではなく、彼の思いはたゆたい、彼方に何もない灰色の海のような「永遠」を想う。そして「期待」を内に含む「現在の時間」を、彼は刻々と「殺して」ゆくのであります。このようなことはすべて、慰めなき自己を認識する者の内部において生じているのであり、外側からは分かりません。このエッセーには、「反乱と諦念」なる逆説的な副題が付されています。

あれからまた数年、いやそれ以上の歳月が過ぎました。いまは、自分の老いを感じる一方で、その眼でもって、同じく時代の動乱を越えて生きてきている、もうひとりのタフな親の老いの姿を身近に見ています。そのようなことをしつつ、観念として分かっていたさまざまなことを改めて体験しています。重荷を負うだけの力も失せてきた頃になって。しかもこれが終わりではなく、私自身が、「肉体としての現存」を示しつつあります。自分がどうなっているのか分からなくなっていくのをやがては体験するのか。すべては我にはねかえってくる。より苛酷になるであろう状況のもとで。もしも私が現在に関する記憶をなくし、心は過去のある時間をさ迷い、予測しがたい空想が、ひそかに自分にもよく分からぬ形で脳髓に展開し、私はいるが私ではない者となり、私の内部にこんな混沌が、つまり「テュボンよりさらに複雑怪奇で傲慢狂暴な一匹のけだもの」が存在することを明らかにするようになるなら、といったことを、いまから思うとすれば、それは未来を呑み込んでしまうことになるのでしょうか？あるいはこれは生起にまつわる不確かさを無視し、これから起こることを、これまで起きてきたことからのみ導き出して、一筋の道しか見ないということになるのであろうか？

「問いは無知なる者によって発せられる。その際、自分がかく問うにいたった原因はそもそもなんであつたかについても、問う者は知らない。」——虚空よりこの言葉が響き返ってくるような思いがします。

空虚が心を見つめます。だが、これはどういうことなのか。そう、いまこそ自己をめぐる逆説的情熱が目覚め、脳髓は活動し、ひそかに反乱を起こしはじめるのであります。身体という、打ち消しようもなく目の前に存在するものの内部において。(1994年7月)

\*

- ・キルケゴール『哲学的断片』(1844年; 杉山好訳), 『死にいたる病』(1849年; 榊田啓三郎訳), 中央公論社「世界の名著」
  - ・『哲学的断片』(大谷愛人訳), 『哲学的断片への結びとしての非学問的なあとがき』(杉山好・小川圭治訳), 白水社「キルケゴール著作集」6-9巻.
  - ・『反復——実験的心理学の試み』(1843年, コンスタンティン・コンスタンティウスの偽名で出版; 榊田啓三郎訳) 岩波文庫.
  - ・『キルケゴール研究』(松浪信三郎・飯島宗淳編; 白水社), とくに,
- ヘルマン・ディーム「セーレン・キルケゴール——神に仕えるスパイ——」(岩永達朗訳)
  - ロマーノ・ガエルディーニ「セーレン・キルケゴールの思想的出発点」(前田敬作訳)
  - ・ヘーゲル『精神の現象学』(1807年; 榊山欽四郎訳), 河出書房「世界の大思想」
  - ・マルティン・ブーバー『人間とは何か』(1948年; 児島洋訳), 理想社.
  - ・『莊子』(森三樹三郎訳), 中央公論社「世界の名著」
  - ・シモーヌ・ド・ボーヴァワール『老い』(1970年; 朝吹三吉訳) 人文書院.
  - ・Jean Améry: Über das Altern——Revolte und Resignation. (1968)